

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03504

研究課題名(和文)教科教育学のパラダイムと社会的責任の国際比較 - 社会科教育研究者が果たす役割とは -

研究課題名(英文) An International Comparative Study on Disciplinary Paradigms and Social Responsibility of Subject Pedagogy: What are the Foundations of Social Studies Researchers?

研究代表者

草原 和博 (KUSAHARA, KAZUHIRO)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：40294269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教科教育学研究のパラダイムの多様性を明らかにすることを目的とする。本目的を達成するために、世界22名の教科教育の研究者に対して、教育・研究観、社会的責任及びアイデンティティについて聞き取り調査を実施した。その結果、研究者が開発・実践に関与する程度は、以下の状況と個人の判断に依存することが明らかとなった。(a)教科指導の理念や方法の在り方をめぐる学術上の言説と現実の実践との間に乖離があるかどうか、(b)研究者は教師教育や調査・研究、組織づくりなどを通して間接的に教育実践の变革を支援したいという目的意識があるか、(c)またそうすることが自己の社会的責任として認知されているか。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the diversity of the paradigm of the subject pedagogy research. In order to achieve this objective, we interviewed the 22 researchers in the world majoring in subject pedagogy about teaching and research philosophy, social responsibility and identity. As a result, it became clear that the extent to which researchers are involved in the society (curriculum development/school practice) depends on the following situation and individual perception. (a) Is there a divergence between academic theory over practice and reality of practice? (b) Does researchers have an intention that want to support the improvement of educational practices through his/her teacher education, research and social service? (c) Is it also recognized as his/her own social responsibility to do so?

研究分野：教科教育学

キーワード：パラダイム 社会的責任 教科教育学 教科教育学研究者 国際比較

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者・分担者らは、これまで「社会科教育研究・実践の改善に資する「研究法ハンドブック」の日米共同開発(基盤B)」、「発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システム改善に関する研究(基盤A)」、「市民性諸教科における教科書及び指導・評価の一体化に関する国際比較研究(基盤B)」、「教科の指導法」を指導できる教師教育者の養成・成長(挑戦的萌芽)」等に従事し、アメリカ、イギリス、ドイツ、カリブ海地域、中国・韓国の社会科教育研究者と交流を深めてきた。

上述の研究過程で直面した問題が、各国の研究者が築いている概念体系や方法論の違いだった。普遍的な価値観と手続きが共有されているかに見える研究の世界にあっても、社会科教育学研究のパラダイムには、「お国柄」が認められる(『日本教科教育学会誌』第34巻3号、第35巻3号)。各国のトップジャーナルに掲載される論文の様式、教師教育の基本理念はもちろん、現職研修や教育政策への関わり方にも多様性が見られた。

結果としてこのような教科教育学のローカリティーの壁が、研究者のグローバルな研究とコミュニケーションを妨げることがあった。この経験は、社会科教育学のパラダイムと研究者の社会的責任を問い直す重要な契機となった。

2. 研究の目的

本研究は、研究活動の国際比較を通して、教科教育学の研究者が果たしている役割と責任を解明することを目的とする。これまでの研究から、世界の教科教育研究者には、「学術研究」「教師教育」「実践支援」「政策立案」への関わり方をめぐって、多様な思想と取組があることが分かってきた。

本研究では、社会科教育ならびに市民性教育の領域を中心に、各国の教科教育学の研究者は、何のために、何を研究し、どのような方法で社会や教育現場に貢献しようとしているかを明らかにする。

上の成果に基づいて『世界の教科教育学・日本の社会科教育研究』を刊行し、我が国の教科教育学の立ち位置と改革の方向性を提言する。

3. 研究の方法

本研究は、「教科教育学のパラダイムと社会的責任」3か国の国際比較研究を、以下の視点と方法で進める。具体的には次の三段階でおこなう。

(1) 基礎調査

各国の学術研究、教師教育、社会貢献(政策立案・実践支援)を担う機関を訪問し、そこで教科教育学の研究者が果たしている実務を中長期的に観察し、記録する。

(2) データ収集と考察

基礎調査の結果を把握するために、につ

いては学会誌の動向とその変化の文献学的調査を行い、研究のパラダイムマップを描く。

については教員養成と社会貢献の担当者にインタビューと質問紙調査を行い、彼らの問題意識を再構成する、

(3) 成果のとりまとめ

各国の研究者を招聘して国際シンポジウムを開催する。「教科教育学のパラダイムと社会的責任」をテーマに議論するとともに、の関係を総括し、その成果を出版する。また、の成果を整理し、研究書を刊行する。

4. 研究成果

(1) 1年次

各国の社会科教育研究者に対して、自己の教育・研究観、社会的責任及びアイデンティティについて、聞き取り調査を実施した。米国から3名(トーマス・ミスコ、アリシア・クロエ、エリザベス・ペロー)、日本から4名(匿名S氏、Y氏、H氏、K氏)。

各国の社会科教育研究者が教育・研究を行っている社会的・文化的な状況について、現地調査及び資料収集を行った。

調査結果を集約し、2016年3月5日に大阪CICにおいて成果報告会を実施した。外部から4名の評価者を招聘し、データの分析や意味づけについて意見を聴取した。本報告会では、教科教育の研究者と教育現場との関わり方には、個人の研究観と社会的文化的な文脈に応じて量や質に差異が生じることが確認された。

(2) 2年次

各国の社会科教育研究者に対して、自己の教育・研究観、社会的責任及びアイデンティティについて、聞き取り調査を実施した。米国から5名(キース・バートン、ブルース・バンスレッドライト、ジェニファー・ジェームス、ベス・ルービン、ソニア・ジェニス)、欧州から3名(アロイス・エッカー、ナンナ・パースキ、シルパ・タニ)、アジア・オセアニアから6名(リビー・タドポール、ナム・ホヨップ、オ・ヨンジュ、コン・オヒョン、沈曉敏、楊虎)。

各国の社会科教育研究者が教育・研究を行っている社会的・文化的な状況について、現地調査及び資料収集を行った。

調査結果を集約し、2017年3月4日に成果報告会を実施した。外部から4名の評価者を招聘し、データの分析や意味づけについて意見を聴取した。

本報告会では、以下の成果を確認した。教科教育の研究者と教育現場との関わり方の量・質は、以下の諸条件に左右される。(a)教科指導の理念や方法の在り方をめぐる学術上の言説と現実の実践との乖離が指摘される状況があるかどうか、(b)研究者がカリキュラムや教材等の開発を通して能動的に介入または先導したいという目的意識をもっているかどうか、(c)またそれを発揮する

ことが自己の社会的責任として認知しているかどうか。言い換えると、(a)教科指導の理念や方法の在り方をめぐる学術上の言説と現実の実践との乖離が克服されていく状況にあるかどうか、(b)研究者は教師教育や調査・研究、組織づくりなどを通して間接的に教育実践の变革を支援したいという目的意識があるかどうか、(c)またそうすることが自己の社会的責任として認知されているかどうか。

(3) 3年次

過去2カ年の成果を総括するために、2018年3月4日に成果報告会を実施した。本報告会では以下の成果を確認した。

アジアの研究者のアイデンティティを記述・分類できた。韓国と中国の研究者は、いずれも日本での留学時代に体得した規範的・工学的な方法論の影響を強く受けていた点では共通する。一方で、母国の教育システムとの関係で、(a)韓国の研究者は教師と密接な関係を築き、現場の授業改善を通じて教育改革を進めていたのに対して、(b)中国の研究者は教育課程の策定に関わり、理想的な教育活動を組み込んだ教科書の執筆と普及を通して教育改革にコミットしていた。

アメリカの研究者のアイデンティティを記述・分類できた。同一の研究系大学に勤務する3人の研究者は、いずれも教職経験をもち、経験的・実証的な研究で学位を取得している点では共通した。一方で、米国ならではの雇用契約に基づいて、(a)大学院における論文指導等に専念する研究指導者、(b)史料館と学校教育の協働に関心を寄せて、教師教育と研究の双方に関与する研究者、(c)学校現場に駐在し、社会科教育の臨床的な指導に従事する教師教育者、それぞれの社会的責任の果たし方が認められた。

ヨーロッパの研究者のアイデンティティを記述・分類できた。フィンランド、ノルウェー、オーストリアの研究者は、いずれも地理学や歴史学など教科内容を専門的基盤としていた点では共通する。一方で、勤務校の要請や個人の信念に基づいて、(a)若者に関する「研究」成果の社会的な発信に努める研究者、(b)「教師教育」を通して社会的課題の解決や啓発を図ろうとする研究者、(c)「管理・運営」を通して教育や研究を組織化し、それらを社会的な存在に高めようとする研究者、それぞれの立場が確認できた。

これらの結果から教科教育学のパラダイムの教科教育学者の責任の果たし方の文脈依存性と主体性を描き出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

Thomas Misco, Jongsung Kim, Kazuhiro Kusahara, Masato Ogawa and Toshinori Kuwabara, A heuristic for controversial

issue gatekeeping within social studies education, *Journal of Social Studies Education In Asia*, 査読有(採択・印刷中)

岩田昌太郎, 草原和博, 川口広美, 教師教育者の成長過程に関する質的研究 - TAの経験はアイデンティティ形成にどのように影響を与えるか -, *日本教科教育学会誌*, 査読有(採択・印刷中)

岡田了祐, 堀田論, 村井大介, 渡邊巧, 田口紘子, 田中伸, 米国の教師教育にみる professional identity の多様性 - 社会科教育を事例とした教科観と教師教育者観に着目して -, *岐阜大学教育学部研究報告 = 教育実践研究・教師教育研究 =*, 査読なし, 第20巻, 2018年, 55-65
<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-1027791398-00>

草原和博, 金鍾成, 河原 光亮, 鈴木 悠介, 兒玉 泰輔, 茂松 郁弥, 山本 稜, 吉川 友則, 探究を軸に子どもの「資質・能力」を育成する社会科カリキュラムの原理とその展開 - NCSS の The College, Career, and Civic Life (C3) Framework を手がかりに -, *学校教育実践学研究*, 査読なし, 第24巻, 2018, 157-166
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00045469>

Hiromi Kawaguchi, Kazuhiro Kusahara, Masato Ogawa, What Japanese High School Teachers Say about Social Studies?, *Journal of Social Studies Education*, 査読有, Vol.6, 2017, pp.97-112, 2017
http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/17190/1/jsse06_cover.pdf

草原和博, 教師教育者をテーマとした RIDLS 国際会議の成果と意義, *学習システム研究*, 査読なし, 第5号, 2017, 103-107
doi/10.15027/42664

Kazuhiro Kusahara, How can Textbooks Be Used for Citizenship Education? Alternative Gatekeeping for Social Studies Teachers, *Proceedings, The International Seminar on Social Studies and History Education, Promoting Justice Equal World, Study Program of Social Studies and History Education, School of Post-Graduate Studies*, 査読有, Universitas Pendidikan Indonesia, 2016, 7-12

草原和博「日本の地理教科書に描かれた自国認識の変遷とそれを活かした授業づくり」, *The Journal of Social Studies*

Lesson Study 韓国社会科授業研究学会), 査読有, 第4集第1号, 2016, 101-114
<http://www.newnonmun.com/article=10755286>

渡邊巧, 大坂遊, 草原和博, 小学校における社会科を中心とした校内研修の意味と効果 - 校内研修の教科教育学的考察 -, 教育学研究ジャーナル(中国四国教育学会), 査読有, 第18号, 2016, 1-10。
[doi/10.20677/csssej.18.0_1](https://doi.org/10.20677/csssej.18.0_1)

金鍾成, 渡邊巧, 大坂遊, 小川征児, 草原和博, 社会科授業の「見える化」による授業の省察方法, The Journal of Social Studies Lesson Study (韓国社会科授業研究学会), 査読有, 第3集第2号, 2015, 23-42
www.newnonmun.com/article=10752297

[学会発表](計11件)

草原和博, 目標と問いに基づいて「見方・考え方」を使いこなす - 社会科の分化・分科傾向に向き合うために -, 社会系教科教育学会第29回研究発表大会(シンポジウム), 京都教育大学, 2017年2月10日

Kazuhiro Kusahara, How to strengthen the relevance of social studies education for the youth? : The development of special civics textbook and its impact to the curriculum gatekeeping, The 2nd International Conference on Special Educational Needs (Keynote), Isola Resort, Bandung, 2nd December 2017

草原和博, The Impact of the Humanities and Social Sciences Discussing Germany and Japan, 広島大学・ドイツ研究振興協会(DFG)日本代表部共催公開サテライトシンポジウム, 広島大学, 2017年11月15日

草原和博, 大坂遊, 岡田了祐, 川口広美, 後藤賢次郎, 齊藤仁一郎, 田口紘子, 田中伸, 堀田諭, 南浦涼介, 村井大介, 山田秀和, 渡邊巧, 渡部竜也, 私たちは如何にして社会科教育研究者としての責任を果たすべきか - 個人史・社会史からみた研究者の変革的成長の過程を手がかりに -, フォーラム, 全国社会科教育学会第66回全国大会, 広島大学, 2017年10月29日

永田忠道・草原和博, 市民性教育の西欧化・米国化と日本型カリキュラムとの相克 - 教科教育の歴史・受容・比較の視点から -, 「日本研究所」創設記念シンポジウム非西欧社会の近代化再考: 日本とエジプト

(アラブ)の場合, カイロ大学, 2017年7月16日

Jongsung Kim & Kazuhiro Kusahara, Lesson Study as Democratic Professional Development: Comparative Case Study of Social Studies Lesson Study (SSLS) in Japan, IDEC Educational Development Symposium "Lesson Study in Asia and Africa", Hiroshima University, 6th April 6th 2017

Kazuhiro Kusahara, Shotaro Iwata, Hiromi Kwaguchi, Yu Osaka and Miyuki Okamura, Symposium; The Problems and Challenges That Teacher Educators Face in Japan, ATEE Annual Conference, Professional Roles of Teacher Educators in Eindhoven, Netherlands, Aug 22-24, 2016

草原和博, 研究者と学校現場が連携した社会科授業研究の諸類型 - 私は何のために・何をしてきたか -, 2016年韓国授業研究学会冬季学術大会(基調講演), ソウル教育大学, 2016年1月

岩田昌太郎, 草原和博, 川口広美, 渡邊巧, 大坂遊, 川口諒, 「教科の指導法」を指導できる教師教育者の養成と成長 - 大学院生はいかにして大学教員になるのか -, 平成27年度日本教育大学協会研究会, 大宮ソニックシティ, 2015年10月

草原和博, 溝口和宏, 桑原敏典, 社会科の何を, なぜ, どのように研究するか - 『社会科教育学研究法ハンドブック』で提起したいこと -, 全国社会科教育学会第64回全国研究大会(フォーラム), 広島大学, 2015年10月

川口広美, 草原和博, 社会科教師は何を教えて何を考えているか - 高校教師のカリキュラム観 -, 日本カリキュラム学会第26回大会, 昭和女子大学(自由研究 - 5), 2015年7月

[図書](計7件)

Kim, J., & Kusahara, K., What is the Lasting Impact of the Use of Nuclear Weapons During WWII in Japan?, Brad M. Maguth, & Gloria Wu. (Eds.). Global Learning Based on the C3 Framework in the K-12 Social Studies Classroom, National Council for the Social Studies(印刷中)

草原和博, 博士論文研究としての教科教育研究, 日本教科教育学会編, 教科教育研究ハンドブック - 今日から役立つ研究手引き -, 教育出版, 2017年, 224

草原和博，社会科教師を育てる教師教育者の専門性開発 - 欧州委員会の報告書を手掛かりにして - ，原田智仁・關博和・二井浩和編著，教科教育学研究の可能性を求めて，風間書房，2017年，336

草原和博，『真正の学び/学力 - 質の高い知をめぐる学校再建 - 』の方法論的検討，フレッド・ニューマン著/渡部竜也ほか訳，真正の学び/学力 - 質の高い知をめぐる学校再建 - ，春風社，2017年，408

草原和博，社会的レリバンスを高める地理授業をデザインする，唐木清志編，「公民的資質」とは何か - 社会科の過去，現在，未来を探る - ，東洋館出版，2016年，168

草原和博，社会科は20世紀初等のアメリカで生まれた，原田智仁編，社会科教育のルネサンス - 実践知を求めて - ，保育出版社，2016年，202

草原和博・溝口和宏・桑原敏典編著，社会科教育学研究法ハンドブック，明治図書，2015年，280

〔その他〕

ホームページ等

<http://hu-kyosha.jp/?p=3944>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

草原 和博 (KUSAHARA, Kazuhiro)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号： 40294269

(2) 研究分担者

後藤 賢次郎 (GOTO, Kenjiro)
山梨大学・総合研究部・准教授
研究者番号： 10634579

田口 紘子 (TAGUCHI, Hiroko)
鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授
研究者番号： 10551707

田中 伸 (TANAKA, Noboru)
岐阜大学・教育学部 准教授
研究者番号： 70508465

南浦 涼介 (MINAMIURA, Ryosuke)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号： 60598754

山田 秀和 (YAMADA, Hidekazu)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号： 50400122

渡部 竜也 (WATANABE, Tatsuya)